

には、刻苦して事に従ひしならん。元來應舉は非常なる勉強家にして、今東京博物館に藏する所の寫生畫帖を見るも、其寫生せし季節、場所、場合等に注意し、些事と雖も苟くもせず、以て其性癖を知るに足る。

應舉已でに一派を成すに至りて、京都に於ては其名大いに振ひしも、江戸に知らるゝに至りしは餘程の後なりき。(此頃には、名聲の京と江戸の間を旅するは長日月を要し、文晁の雷名江戸に轟くも、京に知られしは遙かに後年なりき。)四十歳五十歳の頃は應舉の最も盛なりし時代にして、其以後に至りては、一家の畫風成りて却つて一種の特癖を生じたれども、其初に方りては、人物を畫くにも種々の考按を凝らし、人物を畫かんとすれば、先づ其着する衣服の下の肉取りを調ぶ。然れども其畫く所の人物は餘り巧ならずして、多少蕪村の風あり。舜舉ほどならず。種々に工夫せしも、後に至りて畫風一定せり。晩年の作は左程賞するに足らず。『國華』第二號に、委細に記載せり。就きて見るべし。

斯くて應舉の畫風は之を分ちて四段となすべし。第一は仙嶺風(狩野の變化)第二は元明風を慕ひたり時、第三は寫生風を専らとせし時、第四は其成熟して衰ふるの時、即ち圓山派の一風をなして變化なきの時なりとす。

應舉が畫風は、實に非凡なり。我邦に於ける眞の寫生風は、此人ありて始めて起るを得たり。然れども應舉が寫生風を以て如是の境地にまで到達せるが爲に、日本畫が一轉して忽ち足利以來の深邃なる趣味を失ふに至れるは注意すべし。蓋し彼の雪舟、雪村乃至探幽等にありては、畫を以て我が思想を寫し出すの具となし、その意は形似の外に存したれども、應舉に至りては、意は即ち形似にあるの端を開きたり。その彼に比して一段を下ること言ふを須ひず。將來に於ても、寫生的の考は、狩野と浮世繪と、圓山、四條、岸、何れとも結合し能ふならんが、その何れよりするも、七八十年來の運動は餘りに形似の末に流るゝ弊あり。狩野の如きは、寧ろ古人の形に拘泥し、圓山は寫生風を狙ひて後には實物に拘泥し、近頃に至りては、更らに實物に拘泥して成立ちたるその形式に拘泥す。將來の美術家たるものは、緊揮一番其心膽を練磨して形似を無視する底の覺悟を必要とするなり。徒らに形狀に拘泥せば、應舉吳春の轍を踏むに過ぎざるべし。

應舉の畫風、固より弊害なきにあらずと雖も、應舉自身に於ては、尙ほ氣骨の稜々たるもの存す。是れ畢竟其初めに於ける狩野派の修養與つて力あるなり。其寫生たるや、狩野家の變化を以て、基礎とせるを以て、他の寫生と異なるなり。支那風に於ても亦然り。其筆に成れる山水等を見るも、形狀の外、一種云ふべからざる深趣を有す。然れども晩年に至りては此狩野派の變化なるもの全

然脱却せしを以て、其畫く所のもの下ること數等なり。故を以て、應舉の一代を通して遂に東山風を覘ふの域に達せずして已めり。

應舉の筆、山水花鳥を可なりとす。殊に山水を最も可とす。花鳥に於ては、吳春と伯仲の間にあれども、山水に至りては古今獨歩と稱すべし。先生出づるに及んで大和山水に一生面を開きたり。慣習の勢力は偉大にして、此以前に於ては同じく山水にして、大和、唐の區別甚だしく、唐山水といへば、かすれ多き雪舟風のものにして、大和山水といへば、極めて柔かなるもの、即ち土佐繪等の綠青群青を以て彩色せしものとす。若し此時に當りて先日橋本氏の畫かれたる山水の如きものを畫かんか、日本人の支那に移住したるものならんか、評せらるゝなるべし。然るに應舉は此習慣を打破して、寫生より出せし所の山水を畫く。其石を畫くや、狩野風に據りたれども、大體の上よりすれば一種のものなり。茲に至りて、唐大和の別は全く滅盡せられたり。濃淡等も強からずして、能く大畫に適す。唯その澹泊に失するを憾みとす。其故は先生長く京都に住み、京都風の家に適するものを畫くを以てなり。江戸、殊に此時代に於ける諸入名の書院の如き金張付け等に適する豪壯なるものを畫かずして、小にして澹泊なるものを畫けり。即ち小品體のもの多くして、大作少し。然れども先生の境遇已に然り。之を責むる、或に失當ならんか。

先生一たび出て我が美術上一新時代を成す。其功績永徳に譲らずといふべし。先生温厚沈着にして、吳春の如く交際も上手ならず。只繪畫三昧にして、非常なる勤勉家なりき。晨に起きてより、夜に眠るに至る間、手に筆を放さず。人の繪を乞ふものあれば、其日限を違へず、必ず約を果す。又謹直節儉にして、慈善に富む。先生の時に方りて、社會の狀態は英雄肌流行し、百事皆意氣を尙ぶの風ありたり。現今に於て不規則流行し、禮儀の亂るゝも、已にその萌芽は百年前にあるなり。此の如くなるを以て、美術家文學者と雖も其例に洩るゝ能はず、頼山陽の如きも、其品行に至りては随分正しからず。太平社會の民たるの所爲にあらず。大雅の如きも、亦面白き點はその破格なるにあり。家を出で、半年、富士の勝を探りて歸る。規則立ちたる社會的制裁を打破りて、此の如き事をなすは普通人の爲し能はざる所にして、快は即ち快なりと雖ども、若し殊更に之を爲すに至りては、大いに非なり。俗中の俗は笑つて之を忍ぶべきも、雅中の俗に至りては堪ふべからず。

吳春の如きは酒を嗜み、頗る社交的なりしを以て、當時世人は之を雅なりとし、却つて應舉を俗物視したり。思ふに自己の天職の繪畫にあるを忘れて悠々自適の風あるを以て風流と心得たる者多し。此の如き作家の繪畫は多く見るに足らず。繪畫の爲には身を忘れて一意専心なるをこそ

尙ぶべけれ。繪畫は要するにその繪畫を離れて論ずるを得ず、また繪畫を離れて其人物を論ずる能はざるも、人物を以てその繪畫を推し能ふなり。先生の勤儉なりしは直ちに其畫の重んずべきを知らしむる所以ならずや。蕭白、若冲、一蝶の如き、畫は巧は巧なりと雖も、品位の下るは其人物に因るのみ。雪舟、永徳、探幽の崇敬せらるゝ亦多く言を費さずして明かなり。現代の畫家たる者宜しく先生に就きて鑑むる所あるべきなり。

以上は先生の傳記の一斑なり。その筆にして大作と稱すべきは神戸川崎正藏氏の藏せらるゝ山水なり。南禪寺にありしを移せるものにて、瀧、仙人、樓閣の圖なり。一見、先生がひとり小品に巧なるのみならず、また大作に堪へたるを知るべし。五尺に六尺位の幅なり。其筆力は狩野より出で、墨を惜むこと金の如く、眞に傑作なり。又花鳥の大作は、京都三井氏多く藏せらる。松方伯、鹿島清兵衛氏も、藏せらるゝもの多し。有名なる七難七福の圖は前記の圓満院にありて、七難は二卷に畫き、七福は一卷に纏めたり。其圖、七難は海嘯、大風、火災、強盜、刑罰、地震、病氣これにして、七福は官位、婚禮、富貴等なり。卷を開けば、其圖一々眞に迫り、之を見たる後、二日間位は不快なる感情を存する程なり、是れ先生の長所にして、又短所といふべし。厭ふべき事實を寫して、厭ふの情を生せしむるは寫生なれども、美術なるもの、境界は、其厭ふべきを寫

して、厭ふべく感せざらしむるにあり。彼の藤原信實の北野縁起の如き、人を引裂くの圖あり。又十界曼陀羅には、人の死して腐爛したるの圖あり。一見不快なりと雖も、其畫以外に又一種の快感あり。之を想へば、先生は信實に一步を輸せざるべからず。彼の尾上菊五郎等の活歴主義の弊も亦此所にありといふべし。七難七福圖の寫しは東福寺にもあり、又他にもあり。先生畢生の大作なり。

次に應舉の系統を逐ふものを擧ぐれば左の如し。



長澤蘆雪は、應舉の高足なり。探幽に於ける守景の如く、其畫風を學びて、變體を試みたる

の人なり。後故ありて破門せらる。其繪畫上の力は吳春と伯仲の間にあり。性質大いに奇を好むの癖あり。其子蘆洲は、父の畫風よりは寧ろ應舉の風なり。

源琦は應舉最愛の弟子にして、常に傍に侍し、彩色等の手傳をなさしめたり。應舉晩年の筆に係る彩色は、殆どすべて源琦の手に成るものなりと。

應瑞、應愛等は只其父祖の法を守るに過ぎず。

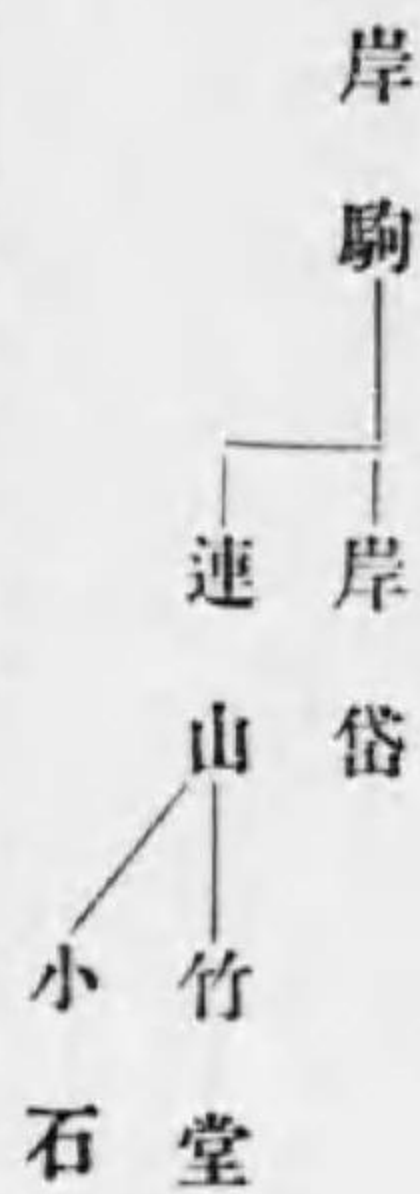
圓山派系圖に據れば、吳春をも應舉の弟子となす。實際弟子なりしが如し。然れども四條派にては曰く、吳春其門に入らんとせしも、應舉之を許さず、友人として交際したりと。要するに吳春は應舉の推薦に因りて名を揚げたるなり。其四條と稱するは、四條通に居りしを以てなり。

吳春、姓は松村、月溪と號す。京師の人。初め大西醉月に學び、後蕪村に従ふ。醉月は祇南海の門に出でし人なりしを以て、其畫風は支那分子大いに勝ちたり。吳春の歿年は文化頃なり。應舉と並び稱せられ、後之を壓倒せり。畫風は磊落にして、晩年に至りて寫生を好む。此人の一生を見るに種々の事をなせり。随分陋しむべき所爲もあり。畫家として世に知らるゝに至りても、應舉の門弟を奪ふ等、卑劣極まれり。其最も得意なりしは、人物なれども、花鳥を可なりとす。山水之に次ぐ。應舉に比すれば、下ること一段、生涯高尚なる思想を發揮し得ざりき。

岸駒、通稱雅樂之助、加州金澤の人なり。應舉より少しく後れたる時代の人にして、幼より畫をかみ、京師に出で、長崎に遊びて沈南蘋に學べりといふ。その若描きを見るに大いに南蘋の風あり。(南蘋を寫せしもの往々あり。)然れども岸駒の長崎に至りしは、南蘋業に已に本國に去りたるの後なるを以て、長崎の通事にして其門弟たりし熊代繡江(熊斐)の許に客となり、之に學べりともいふ。後説或は信すべきか。沈南蘋は沈德潜の親族にして、長崎に留まること三年。彼邦の書に記する所に據れば、畫を以て日本に聘せらるると。

岸駒の長崎にあるや、虎皮の頭あるものを得、工夫を凝らして寫生をなし、號して虎頭館といふ。其畫く所、剝製の虎の如しと雖も、我國に於て寫生的の虎を畫きたるは、此人に始まる。其一生涯畫く所の畫、半ば是れ虎なり。時に鹿猿の類あり。畫風は南蘋風を粗雑にせしものかど覺ゆ。京師に歸るに及び、種々考案を廻らし、時勢に適したる圖を作る。評判を取ることを上手にて後には山師を以て目せられ、京師大山師の三人中に數へられたり。畫料を貪りて飽くことを知らず、嘗て某金滿家謝金二十四兩を出して屏風一双を畫かんことを請ふや、岸駒大いに得意の色あり、畫成るに及びて更に慰勞の宴に某茶屋に招待せらる。岸駒傲然と坐すれば、來會者は十二人計りにて、酒間衣を脱して踊るを見れば豈に計らんや、此人々は皆彼の畫を以て腰巻をなし居たり

岸駒これより聲價を失して、またその書を掛物等にする者無きに至れりとなり。又虎溪三笑の圖を作り、其一人怒るが如しとて攻撃せられ、一時洛中に身を置く所なかりきと傳ふ。其筆にて有名なるは、京師東寺の天井に畫ける自慢の龍なり、雲を畫かず、謝金二百兩なりと、今尙ほ存す。岸駒後に天開翁と稱す、繪は達者にして、動物は應舉吳春にも優る。品位は則ち劣れり。其子岸岱 父に似て亦虎に巧みなり。連山は岸駒の養子にして、今の竹堂氏は連山の養子なり。連山も晩年岸駒の風を去りたるが、竹堂に至りて愈々吳春の風と化す。(巨勢小石氏も初め連山に學ぶ)かくて岸派の系統は左の如し。



又四條派即ち吳春の系統は、



右の如くにして、そのうち景文は吳春の弟なり、兄に比すれば、應舉分子多し。豐彦は、初め景文に學び、後吳春に従ふ。文麟は其弟子にして、岸駒風を折衷したり。其他の諸家は論するに足らず。——要するに、川端玉章氏の如く圓山派の規矩を守る人は極めて少し、多少ながら何れの作家もみな四條派に化せられ居るなり。

此時代に於て、江戸に鳴りたるは、

文晁、谷氏なり。寫山樓、又畫學齋と號し、後年剃髮して文阿彌といへり。初め加藤文麗と稱する幕府の旗下にて、狩野派の書を巧みにせし人に學び、のち文人畫の流行するに至り、時世に従ひて又之を學び、南北二宗を合して一派の畫風を成さんとせるも、之を遂ぐる能はざりき。然れども其名は此大問題に關し、また時勢の中央點に立ちたるを以て、頗る有名なり。此人にして應舉程の手腕あらんか、南北折衷を全うするを得たらんも、南畫風のものを書けば南畫となり、北畫風を書けば北畫となりて、遂に未だ十分に二者を混和して、一個文晁なる特色を出す能はざりき。文晁は樂翁公に愛せられたるを以て、狩野家の外なるにも拘はらず、書院等の畫を作れり。その文人畫の師となりしは、大雅の門人鈴木文雄なりと。文晁の子文二、文一、皆畫を能くす。——

抱一。亦同時の人にして、酒井家の隱居なり。豪奢を極む。狩野風四條派等を學び、後光琳

を慕ひてその風を得、光琳の墓を營み、また光琳會を開く。光琳百圖は、其年忌の時、板行せしものにて、贖物たるを知りながら寫せるもありといふ。

其弟子其一は師に次ぎて亦光琳風の緻密なるものを書く。後、道一あり。中野其明氏は今此派を代表す。

又長崎に於ては、熊代熊妻の外、宋紫石あり。南嶺の弟子にて、江戸の人なり、長崎に遊び、宋紫岩と稱する商人の養子となり、後ち江戸に歸りて行はる。其子紫山、及び此派に紫岡あり。

宋紫石——宋紫山——宋紫岡

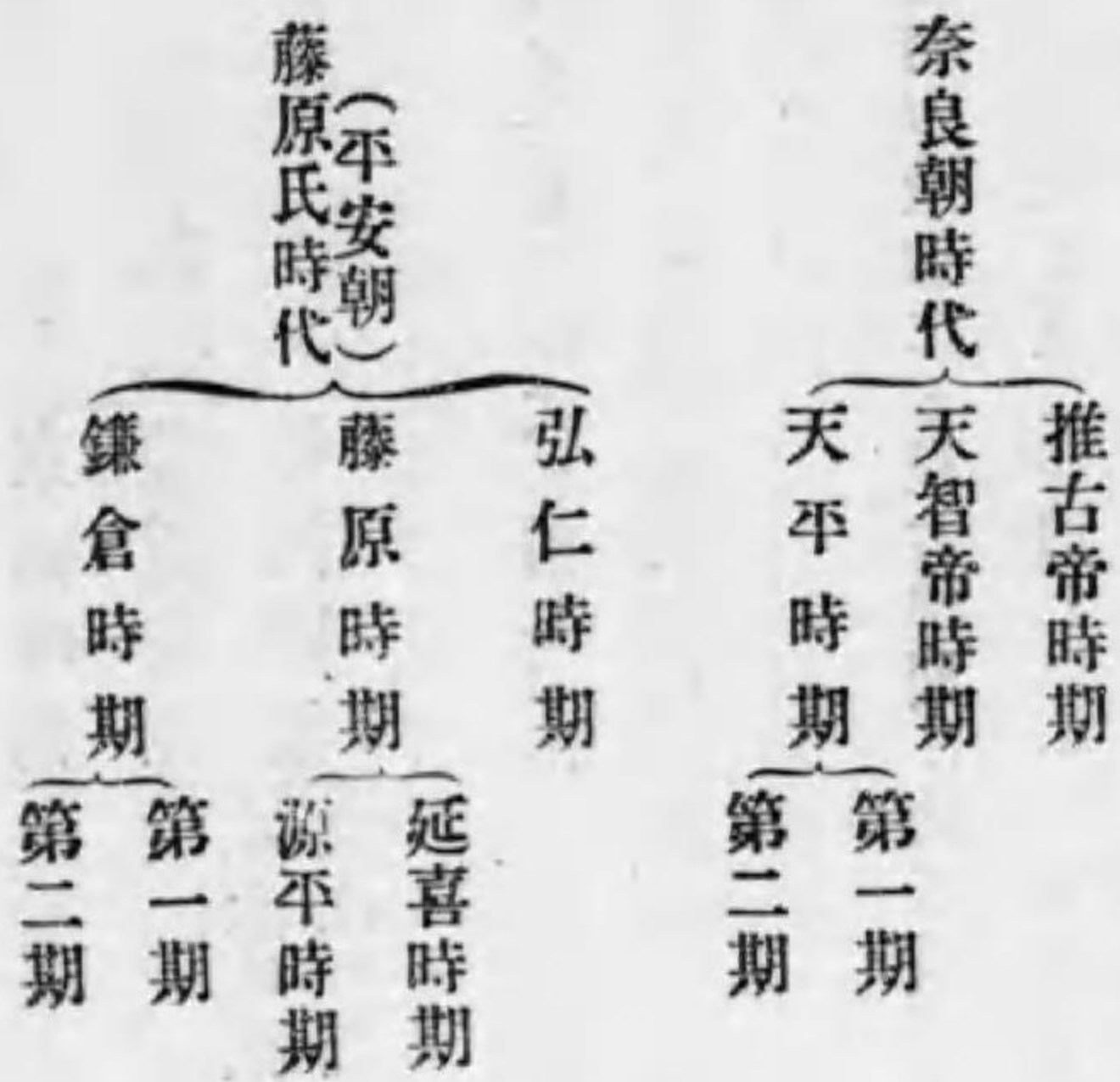
又費漢源の風を書きたる建凌岱あり。硬き畫なり。

總 叙

以上述ぶる所を以て、日本美術史を終らんとす。甚だ不完全なりと雖も、諸君之を以て満足せざるべからず。完全なる美術史を得んと欲せば、少くとも二三十年の後を期せざるべからず。之が任に磨るものは即ち諸君なり。

最初に於て已に述べたるが如く、我が美術史は推古帝時代を以てその發端となす。其以前と雖も、我邦美術と稱すべきもの無きにあらず。然れども今日に現存して以て論證の資となすべきもの無きを以てなり。

推古帝以來凡そ千三百年、明治の今日に至る其間を大別して、三期となし、或は七期となし、或は十四期となし、或は十八期となす。然れども左表を以て最も完全なりと信す。



東山時期

足利氏時代 豊臣時期

徳川時期

寛永時期
寛政時期

上古を奈良朝時代と稱し、中古を藤原氏時代と稱し、近世を足利氏時代と稱す。其間に鎌倉なるものあり。一面は藤原時代に屬し、一面は足利氏の前兆をなす。故に之を中間に置きて、以て一時期となす。

奈良朝の最初たる推古時期に於ては、我邦固有の美術に加ふるに、漢魏及び六朝の初の美術を輸入し、佛教と共に發達して一の美術を成す。鳥佛師、山口大口等之に屬す。

天智時期に於ては、推古美術の進歩したると同時に、支那に於ては六朝の末に方り、南北の争ひあり。時に北朝は中央亞細亞波斯及び印度に接し、交通多かりしを以て、入り來りたる西域美術は、朝鮮或は支那を経て我邦に輸入せられたり。是れ全く漢魏六朝の美術と異なりたるものにして、亦一種の美術を成せり。法隆寺壁畫等之に基く。

天平時期に至りて、奈良美術は極點に達せり。盛の極は即ち衰なり。故に眞正の奈良の美術は、

天智の末、天平の初にありとす。天平に入りても、聖武帝御在世の間を盛なりとす。孝謙帝に衰へ、光仁朝に至りて益々衰ふ。

藤原氏時代とは、平安遷都以後を稱するなるを以て、平安朝時代と稱するも亦可なり。我が天平の末年は、支那に於ては唐朝なれども、此時輸入せしは六朝末の美術なり。純粹唐美術の成りしは、開宗死後四五十年にあり。故に我邦に入りしは、空海傳教の時にあり。即ち我が弘仁時期にして、高雄山曼荼羅等之に屬す。

延喜時期に至りて、前期に入りたる唐風は純然たる日本風となれり。金岡を出し、其餘勢は遠く源平鎌倉に及ぶ。

前時期の趨勢を受けて、剛健優美並び行はれしも、遂には優美の一方に偏し、基光、惠心より隆能、隆親に至りて、其極に達す。

源平時期の初めに方りては、剛健分子興起するの機運に際會し、鳥羽僧正出で、光長、慶恩の先鞭をなせり。

鎌倉時期に二期あり。其第一期は、源平の争亂に、災に罹りたる寺院の再建等ありて、大いに勢力を有し、彫刻には運慶を出し、繪畫には光長、慶恩、信實等の名手あり。第二期に至りて、

漸く衰ふ。

足利時代は、宋元の僧已に鎌倉の第二期に來朝するものありて、此に其分子を胚胎し、始めて墨畫なるものあり。周文、李秀文等、大いに天下に行はれ、雪舟、雪村、正信等ありて、東山時期をなし、足利時代に於ける最盛の時なり。

豊臣時期は、天下の大亂始めて平定に歸し、諸侯の邸第盛んに興り、朝鮮征伐より其影響を受け、華麗にして壯大なる一種の美術を生じ、足利氏の脈絡を破りたり。永徳、山樂之を代表す。

徳川時期に至りて、再び東山式に復し、其寛永時期に於ては、興以、探幽を以て一種の美術を成し、又土佐を一變したるものに、光琳の一派あり。又狩野を一變したるものには一蝶の一派あり。而してやがて流弊の極反動を生じ、以て、

寛政時期をなす。蓋し漢學の隆盛及び寫生派の起るありて、以て狩野派の變化を促し、茲に至りたるなり。

日本美術の變遷、實に此の如し。之を總括して、將來に處する所を考案するに、

第一に記すべきは、精神鋭くして觀念先たつときは興起し、之に反して只管形體を求むるに至れば必ず衰頹す。

奈良朝の初め、其精神あるときは盛んにして、之に満足して其形を求むるに至りて衰ふ。弘仁の時は精神を求め、延喜に至り形と精神と相合して盛時をなし、源平の時に至り形を求めて衰ふ。鎌倉の時、延喜一派の精神鋭くして其盛時をなしたるも、第二期に至りて形の完全するときは已に衰ふ。東山亦た周文如拙の如き、形は不完全なりと雖も精神は甚だ鋭し。元信相阿彌に至れば、東山風即ち牧溪風をなして稍衰兆あり。徳川氏に至りて、探幽は一世の大家なりと雖ども、東山時代を綜合せんとするの念あり。是れ其雪舟に及ぶ能はざる所、其子孫之を模倣して益々衰ふ。應舉の力、亦た探幽と馳騁するに足れり。後人之を學ぶに至りて、其派亦衰ふ。現今の形勢は、狩野の畫妙は既に百年以前に死し、四條は僅かに氣息奄々たり。

其興廢凸凹の度は、略ぼ前表の如し。精神強銳なれば必ず昇り、其形を求めて之に檢束せらるるに至れば必ず降る。此中に於て、最高點に達せしは、天平、延喜、鎌倉、東山なるべし。其間は實に僅少にして、一旦極點に達すれば忽ちにして降下す。彫刻は天平を最極點とし、定朝之に次ぎ、運慶又之に次ぐ。

第二 系統を逐うて進化し、系統を離れて亡ぶ。

美術は孤立のものにあらず。一時期をなすには、必ずその前代と相伴うて形をなす。推古を

天智に進化し、之を天平に完全するは、天平の大家一人の力にあらず。前已に之が基礎を造れるものあり。又例せば、金岡の前には空海あり。光長、慶恩の前に鳥羽僧正あり。雪舟の前に秀文周文あり。永徳の前に古法眼あるが如し。探幽に於ける興以、應舉に於ける始興、友汀の如く、大家なるものは孤立單獨にして出づるものにあらず。系統の外に超出たりし蕭白が、當時の社會に大勢力を有する能はざりしは偶然にあらず。實に斯くの如し、一時を以て完全を望むべからず。同一觀念の系統を追うて、半成の觀念を、更に一進歩せしめんことを力むべし。一度之を中止するに至れば、形に流れて必ず衰ふ。故に美術史上に於ては大家其者よりは、寧ろ之が前驅たりし人を研究するを必要なりと信ず。

第三 美術は其時代の精神を代表し、能く當時の思想を示すの力、特絶なり。

社會の秩序亂るれば、美術亦た衰ふ。其國家生活と密着の關係あること明かなり。又我邦の精神を最も能く代表せるものは美術にして、文學宗教の如き、大いに貴ぶべきものありと雖も僅かに國內に關するのみ、以て全世界を動かすに足らず。獨り美術に至りては、世界に對して日本を代表するものにして、其勢力の廣大特絶なるは、文學宗教の比にあらざるなり。

第四 日本の美術は變化に富むこと

精神上より云へば、奈良朝の理想的なる、平安朝の感情的なる、足利の自覺的なる、之を其形體より論すれば、壯麗、優美、高澹の三大變化を有す。同一種族にして此三者を具備するは世界其例を見ざる所、以て大和民族が美術思想に富めるを證すべし。埃及には埃及の美術ありて、一の變化もなく、アッシリヤ亦た然り。希臘の美術は理想的を以て顯はる。其亡ぶるに至りても決して感情的の美術を生せず、自覺的はた固より見るべからず。伊太利の美術は最も變化に富めりと雖も、感情的にして、自覺理想の精神を有せず。近世の佛國美術亦た然り。獨り我が人種に限りて此三大變化を有するは、甚だ能力の特絶なるを證すべく、以て大いに萬國に誇るに足れり。其將來に於て、如何なる變化を生すべきかに至りては、余が豫知し得る所にあらず、實に諸君の任なり。

第五 適應力に富むこと。

奈良朝は漢魏六朝の影響を受けて成り、平安は唐朝の文化を取りて、之を渾化して延喜時代をなし、東山は宋元の文化を渾化して日本のとなし、豊臣時代の朝鮮に於けるも亦た然り。殆ど其根元を消化し去りて、痕跡を止めず。或は之を以て、我が邦人の摸倣力に富めるの致す所となすは、誤れり。凡そ有機體は無機體を消化して、我が體中の有となして生存し、他物の爲め

に化せらるゝものにあらず。動植物は其消化したるものを滋養となして成長するものにして、國家の開明も亦た種々のものを吸収して之を消化するの力あるに因る。其種々のものを取るの力あるものは、或は其間に悪分子をも吸収することあり。美術上に於ても、此弊を將來せし例頗る多し。其一二を挙げれば、徳川氏の時、明朝の拙劣なる彫刻を輸入して、我が彫刻をして不規則に流れしめたる、又は寛政の頃より文人畫の世に行はるゝに方り、優美の風地を掃ひし如きあり。故に外物を輸入するに際しては、大いに撰擇する所なかるべからず。古昔外國と交通せざる時は、外國の良分子を探りて之を消化するに、百年五十年の長日子を要するも可なりと雖も、今日の如く諸外國と競争するに方りて、其形勢を異にするを鑑みざるべからず。これまた注意すべき點なるべし。

第六 佛教の哲理により、唯心論に傾き、寫生を離れて、實物以外に美の存在を認む。

我が美術は、上來述ぶる如く變化に富むと雖も、何れの時に於ても、寫生主義に重きを置きたることあらず。是れ我が美術の特質にして、其高尚、世界に冠絶する所以なり。希臘美術の興起するや實物其儘の寫生を主とし、伊太利の如き、繪畫は鏡面に映するが如く畫くを以て、最上となし、近世に至りても尙ほ然るなり。我が奈良朝平安朝の如き、寫生は固より力めたりと雖

も、其儘之を重んじたるにあらず。實物以外に美を求むるを主とせり。東山に至りては、墨畫盛んにして、寫生を輕んず。圓山應舉は寫生を以て一派を成せりと雖も、繪畫に於ては寫生を避け、趣味なるものは形體の外に存するを識れり。此の如く、實物以外に美の存在するは、實に東洋美術の大見識にして、實物の研究は十分之を力めしかども、唯之のみに依頼せず。其原因たるや種々あるべしと雖も、佛教の哲理に基き、唯物に反して、唯心に傾けるにあるが如し。然らば、奈良以來、足利に至るまで、美術の佛教に支配せらるゝは免かれ難き事實にして、若し夫れ全く寫生を擯斥せしものに至りては、大いに誤謬に陥りたるものにして、佛教の眞諦よりすれば、物心を區別するが如き、業に已に誤れり、物心は宜しく併行すべきなり。これ將來我が美術の目的なりと信ず。我が文學は佛教の爲めに偏頗なる文學となりしも、美術に至りては大いに之に依りて利益を得たり。

第七 優美なること。

藤原時代に於てわが美術が優美の極點に達せしは、直ちに、我が美術の獨立を示すものなり。思ふに我が美術の大體は優美の性質を有し、藤原氏の時には全然外國の羈絆を脱せしを以て、純乎たるその天真を發揮して優美の極に達せしなり。即ち日本人を放任して、自然の發達を妨

ぐるなき時は、必然此點に歸着すべし。東山時代は最も豪健の風を成せりと雖も、馬遠夏珪を以て、雪舟、正信等に比すれば、我は自ら優美の趣を有し、温乎として玉の如きものあり。此れ美術上大いに重んずべき性質にして、其原因は大和民族の血統にあるか、將た山川風物の秀麗なるに感化せらるゝにあるか、未だ之を知るべからずと雖も、明かに此性質を具備す。然りと雖も、剛健なる性質も亦之なきにあらず。優美の中に剛健を含むは、實に我が美術の最長所なり。狩野氏の末路に方り、強ひて健なるものゝみを書きしを以て、遂に邦人の感情に合せず世に行はれず。四條派をして盛大ならしめたり。故に剛に偏するは、我邦人の本心に逆へり、と云ふべし。

我が日本は、此一小孤島に偏在して、能く三大變化を有し、將來尙は如何なる變化を生じ得べきか、知る可からず。明治維新に際しては、萬事破壊の潮勢に抗する能はず、蒔畫の如き、金碧畫の如きは、之を焚きて黄金を得るに至る、其他美術に對するの慘狀、吾人をして惻然たらしむるものあり。又文人畫の天下に横行するや、日本製の器物は悉皆之を廢棄せんとするが如き氣勢を馴致せしめたり。明治五六年の頃に至りて西洋を慕ふの風生じ、普通の畫家多くは洋畫に轉じたり。是に於てか我が邦純粹の美術は、全然地を拂へり。明治六年埃地利に萬國博覽會の開かるゝ

ありて、今更の如く我が美術の重んずべきを知り、美術工藝まづ起りて、次に繪畫界の覺醒となり、明治十四年に繪畫共進會の開設あり。此時に方り、天下の大家にして陶器の下繪等を作りて、糊口の資となし、世また其姓名をだに知らざるもの多し。而して其形勢は、僅かに衰餘の美術を復古し得たるに止まりて、古畫を摸寫して銀牌を得たるものすらあり。參考の古畫と新製の出品畫と相同じきものあるも、人之を異しまざるの有様なり。斯くて今日に至りては漸く獨立の思想を生じて、其進歩は前日の比にあらずと雖も、其目的とする所は、如何なる點に於てすべきか、一問題なり。狩野家の氣骨は百年の前に已に絶滅し、四條、圓山亦た衰頽して振はず。之を改良するは、如何にせば可ならんか。圖體の改良の如きも、其一なり。圖體なるものは、從來殆ど一定の範圍内にありて、狐、狸、兔、鯉、嵐山等の如し。之を以て我が美術を代表せりとすべからず。人物、歴史、風俗等は、大いに將來に撰ぶべきの題目なりと信ず。又筆意改良も一問題なり。濃淡の如き、濃を主とするもの必ずしも取るべきにあらず、淡必ずしも斥くべきにあらず。彩色の如きも、之を濃厚にせよと云ふも、現今のもの甚だしく澹泊に失するに比して論ずるのみ。諸君の手に成れる繪畫の如き、動もすれば一定の風に傾くの弊あり。以て學校風なるものを生ずるが如きは、成るべきだけ避けられんことを望む。其他、種々研究すべきの問題多かるべし。

余は諸君に勸むるに、左の數言を以てせんと欲す。曰く徒らに古人に摸倣すれば、必ず亡ぶ。これ歴史の證する所なり。系統を守りて進み、從來のものを研究して、一步を進めんことを勉むべし。西洋畫、宜しく參考すべし。然れども、自ら主となり彼を客として進歩せんことを要す。以上、簡單なる美術史にして、諸君の意を満たすに足らざるべきも、次學期に於ける古物學等に據りて、之を補はれよ。

天心全集 畢

大正十一年八月廿四日印刷
大正十一年八月廿四日發行

東京市下谷區上三輪町五十一番地

編者兼 發行所 日本美術院
右代表者 齋藤隆三
印刷者 東京市神田區松平町七番地 佐藤 慶
印刷所 東京市神田區松平町七番地 明治印刷株式會社

天心全集
非賣品

507
28

終